

## 『夷堅志』の編纂と記事提供者：『夷堅支志』を中心として

潘, 超  
九州大学大学院比較社会文化学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1792146>

---

出版情報：中国文学論集. 45, pp.91-100, 2016-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 『夷堅志』の編纂と記事提供者

——『夷堅支志』を中心として——

潘 超

## 一 はじめに

『夷堅志』全四百二十巻は、南宋の洪邁が生涯に亘って一人で編纂した異聞奇談集である。本書は、もともとは三十二志で、『初志』・『支志』・『三志』・『四志』の四大志に分かれ、さらに天干により、各大志はまた十小志（『四志』は二小志のみある）に細分されている。現存するのは、『初志』の前四志（甲志、乙志、丙志、丁志）、『支志』の七志（支甲志、支乙志、支景（丙）志、支丁志、支戊志、支庚志、支癸志）と『三志』の三志（三己志、三辛志、三壬志）のあわせて十四志である。その十四志にはおよそ二七〇〇余条の南宋早期の記事が保存されている。このような膨大な記事の大部分は、洪邁自身の体験談を除くと、家族、友人、同僚などが提供した各地の口承・書承の話である。『夷堅志』の執筆にあたって、洪邁は史官としての立場で、従来の志怪伝奇小説に含まれた虚無幻茫、寓言などの話柄、換言すれば、根拠がなく信憑性の低い逸話を排除し、できる限り根拠のある近年の記事を正確に採録しようとした。『夷堅乙志』の序文によると、洪邁の採録の基準は「遠く遡つても一甲子（即ち六十年）まで、みな記憶が確かな範囲内であり、どれもそれぞれ基づくところのあるものばかりであった<sup>2</sup>」。その他、話の信憑性を高めるために、説話記事の末尾に提供者の名前を記しており、その数百人ほどの提供者は『夷堅志』の成書の取材網と言える。洪邁に情報をもたらした提供者の中には、科挙前の夢・予兆を解釈する読書人、自分の公正な裁きを社会へ周知させたい地方官、名声を博する僧人、医術の高さをひけらかす医者などのさまざまな階層の人が存在し、各

『夷堅志』の編纂と記事提供者

種の目的を以て、逸話・記事を採集・創作して伝えた。ここから宋代社会の意識、生活スタイル、特に情報伝播の実態が窺われる。はじめてその価値に注目した大塚秀高氏は論文<sup>3)</sup>で『夷堅志』が編撰に当たって整えた「取材綱」について論ずべき」だと主張された。のちに岡本不二明氏はそれを受けて、『夷堅志』初志の『甲志』二十卷、『乙志』二十卷の説話記事提供者の事跡、洪邁との関係、提供記事の数などについて詳しく考察した<sup>4)</sup>。また近頃、大塚氏は新たに『夷堅志』の多くの説話記事提供者の中から、洪邁の三族（父族、母族、妻族）の提供者のみに絞って論じ、洪邁と洪氏家族のネットワークについて詳しく考察を行い、最後に『夷堅志』の出版元の変化について論じた<sup>5)</sup>。その一方、『夷堅志』の編纂研究については、残っている『夷堅志』各志の序文に注目することが多く、記事提供者を通じての『夷堅志』の編纂方式・特色については研究がなかった。本論文は、四大志の中で最もしっかりと保存されている『支志』の記事提供者を中心として、『夷堅志』の編纂と記事提供者、『支志』の編纂特色、及び編纂方法など様々な問題について明らかにしたい。

## 二 記事提供者から見た『夷堅志』の編纂

紹熙元年（一一九〇）十二月、洪邁は知紹興府職を離れて故郷である饒州に帰り、それ以後の十二年間はほとんど故郷で『夷堅志』、『容齋隨筆』を編集し続けていた。『甲志』、『乙志』の記事提供者は主に洪氏家族、洪邁と交際のある官僚、及び官僚弟子である。この十一年間、政治の中心を離れて余裕のある故郷での生活を送っていた洪邁が、どのようにして記事を提供されて、編纂をしたのかについて具体的に確認しておきたい。

### (一) 「專業」記事提供者について

洪邁が饒州に帰った後、収録した記事は主に饒州、特に鄱陽県を中心として、近くの余干県、浮梁県、樂平県、徳興県、安仁県、南康軍などの記事であり、『夷堅初志』よりもっと地域性が強いと思われる。『支志』の提供者を以下の四種類に分類することができる。一は饒州に務めた地方官であり、例えば、かつて知饒州事、提点坑鑄錢司公事を務めた黄堂、江南東路提点刑獄を務めた王厚之。二は洪邁の親戚であり、特に各地で地方官を務めた息子、

孫、姪孫、姪など。三は饒州の士人、例えば、朱從龍、張圻。四は各地を行脚する郎中と饒州の寺院の僧侶などである。各階層の提供者は、様々な階層における記事を提供し、同時代の読者は他の階層、特に名門・高官の秘事を窺うことができる。

そのうち、一人のみの力によって十数事、或いは数十事を提供し、また数年に亘って積極的に各地で取材を行った專業記事提供者がきわめて目を引く。今残っている『初志』の前四志を見れば、ほとんどの記事は提供者が時的に洪邁に伝えるので、採集した記事数はきわめて限りがあり、『甲志』二十巻の中に収録された最大の提供者である虞允文は八条、『乙志』における最大の提供者である辺維岳は五条だけである。しかしながら、『丙志』、『丁志』に至って、特に『支志』に至って、数十、さらに百条以上を提供した者が現れる。例えば、『支甲志』十巻において、朱從龍が三巻（全三九条）、鄧直清も三巻、『支庚志』において、呉良吏は三巻（全四五条）、呂德卿は二十条を提供した。『支志』の全体から見れば、それらの重要な提供者は、それぞれ十数条以上の記事を提供している。

特に注目すべきは、自ら記事の真偽の確認、逸話の關係者への取材を行った專業提供者である。『支庚志』巻六の「潘統制妾」は、武官の潘璋の妾が方術に精通して、ある日突然行方不明になるという伝奇的性格の話である。その話の提供者である呉濠は鄱陽県の士人であり、湖北で目撃者の秦奎から潘璋と妾の事を取材し、また江西廬州で潘璋本人と逢い、その事の詳細を得た（訪得本末甚詳<sup>6</sup>）。それだけでなく、三年後、呉濠は四川で呉漢英という關係者に、潘璋と妾の以後の行方について詳しくたずねた。『支甲志』からの各志において、呉濠のような、洪邁の代わりに、積極的に異聞奇談を採集し、さらにその事件の目撃者、關係者に訪ねて詳しく調査をした記事提供者も続々と出てくる。また複数の記事の来源があるときは、それを忠実に洪邁に提供し、客観性を保っている。例えば、『支志』で活躍した記事提供者である鄭栗は福建莆田の人であり、饒州に務めた期間に洪邁に多数の福建の記事を提供した。『支庚志』巻三「黄瓊州」は、福州の士人である黄揆が不吉な預言に当たり、海南で亡くなった話である。鄭栗はその話の末尾に「黄之姪所說微不同（黄（揆）の姪が語ることは僅かに異なる）」と加え、關係者である黄揆の姪が話した別の系統のエピソードを追加した。また、『支甲志』巻九「閩王幟頭」では、提供者である朱從龍は自分の質疑も最後に加えて、さらに「之を蜀客に質問すべき」<sup>7</sup>だという。その当時の地方士人と地方官は往々にして仕

学により各地を巡り歩き、各地の異聞奇談を大量に採集し、整理した。そして饒州に帰った際に洪邁に提供したのであった。

### (二)『夷堅支志』の編纂方針

増加した專業提供者は『夷堅志』の編纂に対して、豊富な説話を提供した。そのため、『夷堅志』の編纂ペースは極めて早くなった。

『支志』の最初の『志甲志』の序文は、『初志』十志の成書を振り返り、以下のように述べる。

『夷堅』之書成、其志十、其卷二百、其事二千七百有九。蓋始末凡五十二年、自『甲』至『戊』、幾占四紀、自『己』至『癸』、才五歲而已。其遲速不侔如是。

『夷堅』の書は完成し、其の志は十、其の巻は二百、其の事は二千七百九である。凡そ始めから終わりまで全て五十二年で、『甲』より『戊』に至るまでは、殆ど四紀を占め、『己』より『癸』に至ると、わずか五年のみ。其の速い遅いが侔しくないのはこのようである。

序文では、『甲志』、『乙志』、『丙志』、『丁志』、『戊志』の編纂が長い時間(約四十八年)かかったことを述べて、のちの『己志』から『癸志』にかけての編纂ペースが速いことに感嘆している。『支甲志』の成書のわずか八ヶ月後、第二志である『支乙志』十巻の編纂も終わった。それ以後、各志の編纂期間が次第に早くなり、『支景志』序文に、

歲兩月、『支乙』成、十月、『支景』成、書之速就、視前時又過之。<sup>10)</sup>

今歳の二月に、『支乙』は完成し、十月、『支景』は完成した。以前に比べると速い。

とある。とくに慶元二年三月以後は、ほとんど三、四ヶ月という極めて短い時間しか要しなかった。

その編纂・出版ペースの速さにより、ある記事は昔の伝奇と大体同じだと指摘された。洪邁はやむを得ず『支甲

志』序文で、世の中の事は「有萬不同」と弁明し、同じ事件の異なる記述の意義を強調した。『支丁志』巻六「証果寺習業」と今『志補』巻十六に載せる「嵯峯山庵」の粗筋は同じだが、その発生地方（明州と会稽）と最後の結末は相違がある。洪邁は「証果寺習業」の最後に「姑復書之、以広異述」（ひとまず再び之を書いて、異なる記述を広げる）」と編纂意見を書いた。その「異述」とは、まさに逸話の流伝により起こる異なる系統テキストのことである。異議を受けた洪邁は自分の編纂基準について、話の同異を保存するためという理由を述べている。その一方、今日の研究者の立場から見れば、その「以広異述」の編纂方針を取ったからこそ、記事の流伝により生じた各種貴重なテキストが現在にも『夷堅志』の中に保存されていることになる。

その他、以上のような外部の批判を免れるために、洪邁自身はある記事に対する自分の疑問を加えていた。例えば、『支癸』巻八「趙十七總幹」では、洪邁が主人公及びその子と知り合いからその話を聞いたことなかったため、その末尾に「未聞夢異」と疑いを抱いていることを記した。また、『支癸志』巻二に収録された「楊教授母」では、記事提供者により淳熙五年（一一七八）に主人公である楊光が科挙に合格したというが、洪邁が『登科記』を調べたところ、その年に楊光の名前が見当たらなかったため、末尾に自らの疑問を記した。

要するに、増加した專業記事提供者の出現につれて、洪邁は『夷堅志』編纂初期の採集者の立場から、読者の存在、社会の影響を考える編纂者・出版者へと変化することとなったのである。このことは、『夷堅志』の編纂における大きな変化であった。

### 三 『夷堅志』の編纂の特色について

しばしば『夷堅志』と並挙される北宋時代の『太平広記』は、漢代から北宋初期の異聞奇談を収録したが、宋代を通じて流布がきわめて限られていた。しかも収録された小説は概ね宋代以前のものである。また『夷堅志』の初志の記事は同時代（殆どは南宋前期）の記事であって、『太平広記』のような志怪小説集と異なるが、取材の記事は往々にして数年、数十年前の風聞であり、当時の読者にとって少し古い年代感があっただろう。それに対して、

『夷堅志』の編纂と記事提供者

『支志』の場合はその年に起こった出来事、時には先月発生したばかりの奇異事件が掲載され、その発生時間は緊迫感がある。例えば、『支庚志』巻一「臨安税院」は、臨安府都税院の院吏員の粗略により、同院の神祠の神を怒らせて、慶元二年（一一九六）五月と十月に二回の不祥事が起き、都税院の役人と監官ともに処分を受けて職を辞めたという話であり、その記事の提供者はまさにこの事件の主人公である都税院の監官、洪邁の甥である余玠に当たる。『支庚志』は慶元二年（一一九六）十二月に完成したが、余玠は同じ年の十月に臨安での職を辞めている。つまり、罷免された余玠は臨安から饒州に帰った後、すぐに自身の罷免の経緯を洪邁に伝えたのであろう。また、『支志』の編集は、すべて洪邁の故郷である饒州で行われたので、収録された一部分の記事はローカル色が強く・細かくて煩雑なものが多い。『支戊』巻八「雷震鷄」は、慶元二年六月八日に洪邁がいる饒州で、強い落雷（大雷震霆）により献上品としての鶏が殺された記事であり、饒州当地の人々はそれが神の報いだと考えた。洪邁の序文によると、『支戊志』は慶元二年七月の初五日に完成しており、即ち落雷事件の一月後である。これは、今日の地方紙・ローカル紙に載せる地元の身近な記事のようなものと同じであらう。『支癸志』巻六の「大孤山船」、同巻の「城隍廟探雀」などはすべてその類に属する。

こうした刊行ペースの早さに伴って生じた編纂方式は、以前の小説出版には見られず、そのほか、現在の新聞メディアがよく用いる後続記事、関連記事、匿名記事というような性質の記事も出てくる。

### （一）後続記事

『支甲志』巻八「山陽癡僧」は、紹興年間に起こった楚州の僧侶行欽の不思議な逸話で、その結末は主人公である行欽が行方不明となり、記事は終わる。しかし、その二年後に完成した『支丁志』巻九「楚州癡僧後紀」に、

楚州癡僧行欽者、『支甲』載其事、云不知所終。浮梁人計晋道説、数年前<sup>①</sup>……。  
楚州の癡僧である行欽は、其の事が『支甲』に掲載されて、行方不明と云う。浮梁人の計晋道は言う、「数年前に……。」

とあり、数年前行方不明になった行欽が再び楚州に出現し、反乱を計画した武官を殺したことを述べている。これらの逸話とともに楚州で誕生したが、提供者が異なっている。「楚州癡僧後紀」の中に「浮梁人計晋道説」と記述するが、本巻末の末尾に「此卷皆朱從龍説」とある。朱從龍は『宋史』には伝記がないが、『支丁志』巻九「塩城周氏女」、「三己志」巻四「于允昇冤鬼」によると、朱從龍はかつて楚州都轄を務めたことがわかる。また『夷堅志』の提供者の記入原則に照らせば、この記事は朱從龍が楚州都轄を務めていた際に、計晋道から行欽のその後を聞いて、それを洪邁に伝えたという採集経路だと思われる。

そのほか、後続記事の性格をもつものとして、例えば、『支戊志』巻二「孫知果妻」では、丹陽県の士人孫知果（知果は名前）は自分のひとときわ美しい妻が、実は白蛇であったことを発見した後、ほどなくして亡くなった。一般の志怪小説では、しきたりとしてその妻は往々行方不明になるのに、その小説においては、「此婦至慶元二年、年恰四十、猶存（此の婦人は慶元二年で、ちょうど四十歳であつて、なお生きてゐる）」と記述する。『支戊志』はまさに慶元二年に完成したので、洪邁はその人間の姿に化けて現れたものがなお存在することを読者に示している。その他、前述した『支庚志』巻六の「潘統制妾」は、その提供者である呉濤が、数年後に四川で内情を知っている人々を取材し、「妾今在父母家、無恙（妾は今に両親の家において、無事だ）」と後続の事がわかるようになってゐる。その身近な怪異は言うまでもなく当時の読者に強いインパクトをもたらしたことが想像できるであろう。こうした後続記事の性格をもつものとしては、「楊教授弟」、「上王<sup>(15)</sup>」などが挙げられる。

## (二) 関連記事

『夷堅志』は巻数が膨大なため、一般の読者にとつては、全てを入手することが困難であつた。そして南宋時代に読者の満足を叶える為に、『夷堅志類編』、『新編分類夷堅志』などの分類選本が出てくる。その一方、『夷堅志』の編纂において、洪邁自身も意識的に同じ類に属する関連記事を取り上げて読者に注意を与えたことが考えられる。例えば、『支甲志』巻十「復州菜圃」では、洪邁の兄の子である洪樛が復州の菜圃で女鬼と出会つた事を述べて、最後に「『庚志』に所載された傅旺が夜に女鬼と見たところは、まさにここに<sup>(16)</sup>ある。」と書き加え、意識的に読者の恐怖心を煽ぐことをした。また『乙志』巻一「侠婦人」の原文は、侠婦人が負心漢である董国度を殺した記事であ



り、『志補』卷十四に収録された「解洵娶婦」は同じ負心譚に属しているので、洪邁は「此蓋古劍俠、事甚與董國度相類云」(此れは古代の劍侠の事で、甚だ董國度と相類すると云う)と最後で意見を述べている。

(三) 匿名記事

南宋時代における印刷技術の発達に伴い、『夷堅志』の流布地域が広がり、伝播が速くなった。とくに『支志』の各志は、編纂の期間が短く、前述したように、数ヶ月前の出来事や社会の实在の人物を物語化する、当時生きていた知人や家族からの圧力を受けたと推測できる。実際に『乙志』が出版された後、その中の幾つかの記事の問題点が指摘され、洪邁はやむをえず乾道八年(一一七二)に、原刻本のなかの五話を削除して二話を改訂し、新たに刊行した。それらの記事はいずれも「其究乃至於誣善(その最後は善人を中傷するに至った)」という指摘を受けたのである。当時の人間関係に関連していたため、社会の圧力を受けることがあると推測できる。改訂された記事の「侠婦人」のテキストも一部削除されるなどの作業を経ており、その削除テキストの内容は、南宋の官員の董國度の負心のスキャンダル、及び董妾の復讐、董國度のなくなつた様子などのプロットである。

『支甲志』卷四の「蕪守妻妾」は、前述した「侠婦人」のような妻が妾を苦しめ、妾の復讐をする話である。そのスキャンダルを暴いた作品の小注には「不欲記姓名(名前を書いて欲しくない)」とあり、官員である夫の名前を隠し、ただ官職(蕪春太守)を書くのみである。『支志』において当時における士人の不名誉な事に対して、現在の新聞報道の匿名報道という方法をしばしば用いる。こうした記事提供者を匿名にすることは、編纂者である洪邁の慎重さということだけでなく、記事提供者の要請による場合もある。例えば、『支景志』卷九「王鼎尉小箱」は記事提供者の呂叔炤が同僚の「王生」の色事を物語化したものである。その記事の結末において提供者が「王氏の名前を書いて欲しくない」と記している。

要するに、『夷堅志』伝播のペースの速さと、当時の人間関係についての指摘により、洪邁は提供者が提供した情報、記事の扱いに対して慎重な姿勢を示している。これは以前の志怪小説の編纂とは異なっている。

#### 四 まとめ

編纂ページの加速によって、以前の小説出版に見いだせない現象、例えば、現在の新聞メディアによく用いられる後続記事、関連記事、匿名記事が出てきた。これらは『夷堅志』の編纂によって洪邁の周辺に多数の専門記事提供者の出現したと関連する。その人たちは洪邁の代わりに、積極的に異聞奇談を採集し、さらにその事件の目撃者、関係者に訪ねて詳しく調査した。このように専門記事提供者の増加につれて、洪邁は『夷堅志』編纂初期の採集者の立場から、読者の質問、社会の影響、及び内容の真偽を考える編纂者・出版者へと立場を変化させたのであった。

#### 注

- (1) 『夷堅志』に収録された異聞奇談は、複数のジャンルに属するので、本稿は、ジャンルにより異なる呼称（小説、記事、逸話）を用いる。
- (2) 「若予是書、遠不過一甲子、耳目相接、皆表表有據依者。」洪邁『夷堅志』（中華書局、二〇〇六年）、第一冊、一八五頁。
- (3) 大塚秀高「洪邁と『夷堅志』——歴史と現実の狭間にて」（『中哲文学会報』、第五号、一九八〇年）。
- (4) 岡本不二明『夷堅志』甲志二十巻の成立過程について」（『岡山大学文学部紀要』、第二一号、一九九四年）及び『夷堅志』乙志二十巻の成立過程について」（『岡山大学文学部紀要』、第二三号、一九九五年）。
- (5) 大塚秀高『夷堅志』は如何にして成ったか——洪邁三族の『夷堅志』編纂に果たした役割」（『饜養』、第二三号、二〇一五年）。
- (6) 洪邁『夷堅志』（中華書局、二〇〇六年）、第三冊、一一八〇頁。
- (7) 『夷堅志』第三冊、一一五五頁。

『夷堅志』の編纂と記事提供者

- (8) 『夷堅志』第二冊、七八三頁。
- (9) 『夷堅志』第二冊、七一頁。
- (10) 『夷堅志』第二冊、八七九頁。
- (11) 『夷堅志』第三冊、一〇一二頁。
- (12) 『夷堅志』第三冊、一二八二頁。
- (13) 『夷堅志』第三冊、一〇四一頁。
- (14) 中華書局本は慶元三年に作り、四庫本は慶元二年につくる。『支戊志』が慶元二年七月に完成されたので、「三」は「二」の誤写だと思われる。
- (15) 四庫本は表題を「王二」に作る。
- (16) 『夷堅志』第二冊、七九一頁。
- (17) 『夷堅志』第四冊、一六七六頁。
- (18) 拙稿「上海図書館所蔵明抄本『夷堅志乙志』について」(『日本中国学会報』第六七集、二〇一五年)。
- (19) 『夷堅志』第二冊、七四二頁。
- (20) 『夷堅志』第二冊、九四八頁。